

知的障害のある人の障害認識と障害受容に関する研究

—知的障害のある人の語るライフストーリーを通して—

○ 青山学院女子短期大学 氏名 杉田穂子 (2873)

キーワード3つ：知的障害、障害認識、障害受容

1. 研究目的

障害のある人本人に対する障害受容研究は、これまで主に身体障害（なかでも中途障害）を中心に行われてきた。一方知的障害のある人本人については、障害受容よりも障害認識を問う研究がみられる。スウェーデンでは1980年代ごろより、知的障害のある人へ障害認識を促すための本人向けテキストが出版され、適切な障害認識は障害受容を促すとしている。一方、清水(1999)は、障害認識と適応（障害受容）に関して4タイプに分け、障害を認識したからといって、必ずしも適応している訳ではないし、障害を認識していないからといって必ずしも不適応であるわけでもないことを示している²⁾。

2. 研究の視点および方法

先行研究から、知的障害のある人の障害認識と障害受容は、重なりをもつ場合もあるが、異なる場合もあることが示されている。しかしなぜ障害認識がありながら、受容している人、そうでない人がいるかは明らかにされていない。筆者は、その理由をさぐるために知的障害のある人の語るライフストーリーが手掛かりになるのではないかと考えている。2010年～2015年に109人の知的障害福祉サービスを利用する人に個別インタビューを行った。必要な場合には複数回行った。インタビュー時には、小さい時の出来事、学齢期の出来事、学校教育を終了してからの出来事、福祉サービスを利用したきっかけ、利用してから現在までの生活、将来の夢などについて自由に話してもらった。さらに「自分には障害があると思うか」、「そのことをどう思うか」といった障害認識についての質問も行った。

3. 倫理的配慮

対象者には、インタビューは研究目的であることを事前に施設を通じて本人に知らせ、施設名、名前を明らかにしないことを約束している。本発表に際し、再び施設担当者に内容を確認してもらい了解を得た。

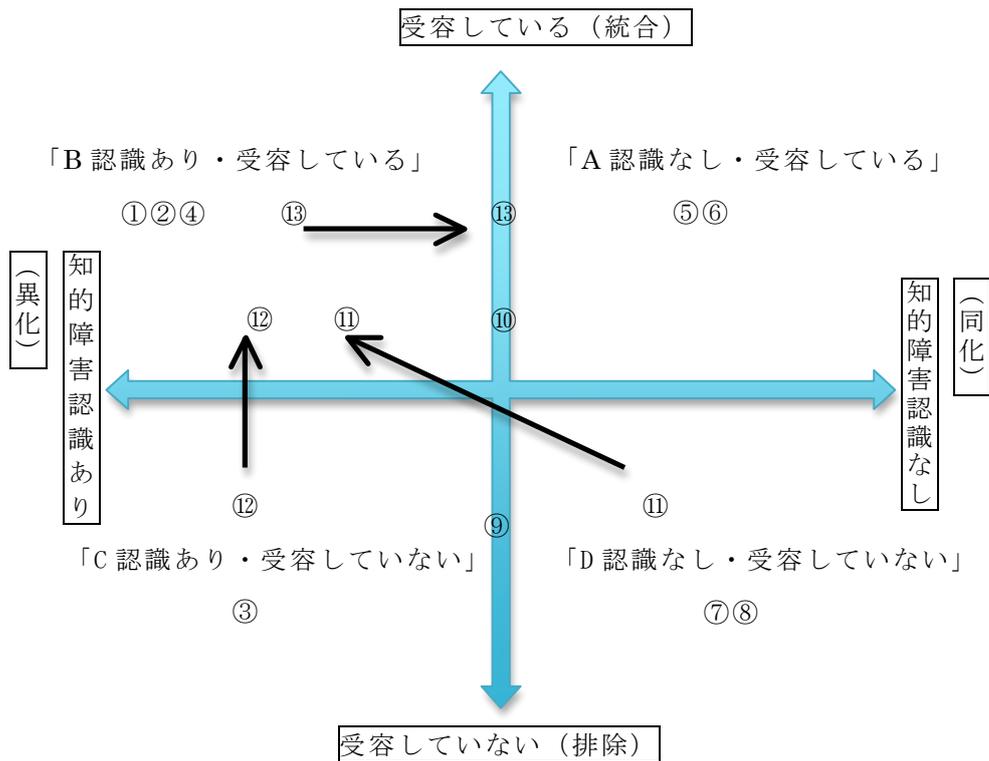
4. 研究結果

本発表ではライフストーリーの語りから、知的障害認識とその理由、つまりそのような障害認識に到ったのかの理由を語った13名について取り上げた。石川の分類³⁾に依拠しつつ、横軸に「知的障害認識」（同化-異化）縦軸に「障害受容」（統合-排除）をとり13名の状態を示したのが図である。

5. 考察

図より、知的障害のある人の障害認識と障害受容は同義でないことが明らかになった(A、C象限の人の存在)。A象限の人たちは、知的障害は「ない」と語るが、養護問題・慢性

図：知的障害のある人の「知的障害認識」と「障害受容」



疾患・身体障害などを「障害」として受容し、周囲の知的障害のある人たちと自分とを差異化し、時には支援者役割を演じながら生活に満足している人たちである。C 象限の人たちは、知的障害認識はあるが、受容していない人たちで、幼児期から親や周囲の人から否定的な言葉で障害告知をされたり、いじめを経験してきた人たちである。また社会の中の立場の変化(⑪グループホームを利用し自立したという自信をもつ, ⑫仲間から疎外されていた立場から頼られる立場になる、⑬利用者という立場から知的障害の仲間を支援する立場になる)によって認識が「ない」から「ある」へ、「ある」から「ない」へ、「ある」から「わからない」へ変化が見られる人たちもいた。

以上、知的障害のある人の障害認識・受容はその人の語るライフストーリーと深い関わりがあり、社会の中の立場の変化が認識・受容も変化させていく場合もあると考えられる。

参考文献：

- 1) 大井清吉, 柴田洋弥監修、尾添和子訳 (1994) 『障害の自己認識と性』 大揚社
- 2) 清水直治 (1999) 「知的障害者本人の障害理解と心理的支援」『東京学芸大学紀要 1 部門』 50, 285-92.
- 3) 石川准 (1992) 『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』, 新評論, 55

本研究は平成 28 年度科学研究費助成事業基盤研究(c) (課題番号 26380825)「知的障害のある人の語るライフストーリーと障害の自己認識の関連性に関する研究」によるものである。